

第四章

私は、アン・マンズフィールド・サリバン先生が来て下さった日のことを、私の生涯の最も大切な日として忘れることができません。この日を境にして私の二つの人生があまりにも対照的なので、そのことを考えるとき、私はいつも驚きを禁じ得ません。それは一八八七年三月三日、私が満七歳になる三ヶ月前のことでした。

私は、あの重要な出来事のあった日の午後、説明することのできない何かを期待する気持ちで玄関の前に立っていました。私は母親の手まねと家の中のあわたたしきから、これから特別のことがあるらしいという漠然とした思いがして、ドアの外に出て、階段のところで待っていたのです。午後の光は玄関を覆ったスイカズラの茂みを透かして、仰向けた私の顔に降り注いでいました。私の手は、南部のうるわしい春の到来を告げている慣れ親しんだスイカズラの葉と花を無意識のうちに撫でていました。これから私の身に起ころうとしている奇跡と驚きについて何も知りませんでした。私は何週間にもわたって怒りと悲しみにさいなまされ、その苦しみの果てに、ひどい無気力状態に陥っていたのです。

あなたは海上で濃い霧に閉じこめられ、まるで手に触れることのできるようなその白い闇の中で、巨大な船がおもりと測鉛線だけを頼りに岸の方向へ進みながら、次の瞬間に何が起きるのだろうか、緊張と不安で心臓をどきどきさせた経験がおありでしょうか。教育が始まる以前の私は、ちょうどその船のようなものでした。ただし私には羅針盤も測鉛線もなく、港が自分のどれほど近くにあるのかさえ知るすべがありませんでした。私の魂は「光を！私に光を下さい！」という言葉なき叫び声をあげていました。まさにそのときでした。愛の光が私に注がれたのです。

私は人が近づいてくる足音を感じて、それを母だと思い、手を伸ばしました。すると誰かが私の手をつかんだのです。その方は私に全てのものを見せて下さるため、というよりそれ以上の、私を愛して下さるために来られた方でした。私はその方の両腕に強く抱き締められていました。

先生がおいでになった日の翌朝、先生は私をご自分の部屋に連れてきて、人形を下さいました。あとになって知ったことですが、その人形はパーキンス盲学校の子供達からのプレゼントで、服はローラ・ブリッジマンが着せてくれたものでした。私がお人形でしばらく遊んだあと、先生は私の手のひらにゆっくりと「d-o-l-l」と文字を綴られました。

私はすぐその指遊びに興味を持ち、まねをしました。何回かまねて、最後に正しい綴りができたとき、私は子供っぽい喜びと得意な気持ちで有頂天になり、一階にいる母のところまで駆け下りると、自分の手のひらを上にあげ、「doll」の文字を書いてみ

せました。そのとき私は言葉というものの存在さえ知らず、まして自分が言葉を綴ったのだということなど想像もできませんでした。私は猿が人間のまねをするように、ただまねて指を動かしていただけでした。

それからというもの、その意味するところが分からぬままに、ピン、ハット、カップなどたくさんの言葉の綴り方を覚え、また、座る、立つ、歩くなど、いくつかの動詞も覚えました。しかし、私が全てのものには名前があるという事実を理解できるようになるまでには、サリバン先生はまだ何週間も待たなければなりませんでした。

ある日、私が新しい人形で遊んでいると、先生が、ボロでできた大きな人形を私の膝の上に乗せて「d-o-l-l」と綴り、それが二つの人形に共通する言葉であることを理解させようとされました。その日は朝から「m-u-g」と「w-a-t-e-r」の二つの言葉と格闘していました。先生は「m-u-g」がカップで「w-a-t-e-r」が水であることを私に教え込もうとされたのですが、私はいつまでたっても二つを混同していました。先生は落胆して、もう一度はじめからやり直そうとして、少し休まれたのですが、私は繰り返しが嫌になって癩癩を起こし、新しい人形をつかんで床に投げつけてしまいました。私は自分の足もとに壊れた人形の破片が飛び散るのを感じて、痛快な気持ちでした。

癩癩を起こしたあとでも、私には何の悲しみも悔いもありませんでした。その人形が好きだったわけでもありません。私の住む沈黙と暗闇の世界には、いかなる感傷も優しさも存在していませんでした。先生が人形の破片を暖炉の方へ掃き寄せていらっしゃるのを感じながら、私は不快の原因がなくなった満足感に浸っていました。

そのあと、先生が私に帽子を渡して下さったので、これから暖かな日差しのある戸外へ出て行くのだと思いました。言葉によらない思いというものを「考え」と呼べるのであれば、このように考えたとき、私は嬉しさのあまり飛び跳ねていました。

私達はスイカズラが覆っている井戸小屋の方へ、その花の甘い香りに誘われながら道を下って行きました。するとそこでは誰かが水を汲み上げており、先生はポンプの汲み出し口に私の手を出させて、その手に冷たい水の流れを注ぎながら、もう一方の手に、はじめはゆっくりと、次には素早く「water」と綴られました。私はじっと立ったまま、全神経を先生の指の動きに集中させていました。

すると突然、忘れてしまっ**て**ぼんやりとしていた意識が、震えるような感動を伴いながら一つの考えとなってよみがえってきたのです。言葉の持つ神秘的な力が、私の前に明らかになりました。私は「w-a-t-e-r」が今自分の手に注がれている、冷たい不思議なものを意味しているのだということを理解しました。命あるこの言葉は私の魂を目覚めさせて自由にし、そして光と希望と喜びをもたらしてくれたのです。越えるべき障害は他にもたくさんありましたが、この最初の障害を越えたとき、残りは時間をかけさえすれば取り除くことのできるものばかりでした。

私は学ぶことに熱中する人間になって、井戸小屋を離れました。全てのものに名前があり、そのひとつひとつの名前が、私の中に新しい概念を生み出しました。家に戻ると、触れるもの全てが生き生きと躍動しているように感じられました。それは私に与えられた不思議な新しい目で全てを見るようになったからです。部屋に入ると、自分が壊した人形のことを思い出しました。私は暖炉の方へ探り寄って破片を拾い上げ、それをつなぎ合わせようと虚しく努力しました。そして両目から涙があふれ、私は自分のしたことを悟ったのです。それは私が後悔と悲しみを感じた最初の出来事でした。

私はこの日にたくさんの言葉を覚えました。それらが何という言葉だったのか、全部は覚えていませんが、お母さん、お父さん、妹、先生、などでした。これらの言葉は、アロンの杖に花が咲いたように、私の住んでいる世界に花を咲かせてくれました。

この重要な出来事のあった一日が終わって、小さなベッドに横になり、自分に訪れた喜びを思い返していた私は、ほかのどんな子供よりも幸せでした。私はこのとき初めて、翌日の新しい到来を待ち望む気持ちになりました。

第五章

突然訪れた魂の目覚めに続く、その年の夏の出来事をたくさん思い出すことができます。何をやるよりも私は手探りで歩き回りながら、手に触れる全てのものの名前を覚えようとしました。いろいろなものに触れてそれらの名前を知り、さらにその用途を知れば知るほど、自分がこの世界と緊密に結びついているということが感じられて、喜びと自信を持つことができました。

ヒナギクやキンポウゲの咲く頃に、サリバン先生は私の手を取り、農夫が種まきの準備をしている畑を横切って、テネシー川の土手まで連れて行って下さいました。その暖かな草の上に座り、大自然の恵みについて初めて教えていただきました。人間に食物を提供し、かつ美しい景観を作り出してくれる全ての木々を、太陽と雨がどのようにして大地から育てるのか、また鳥がどのようにして巣を作り、生活し、あちこちと飛び交いながら成長していくのか、リスや鹿やライオンや、そのほか全ての生き物が、どのようにして食べ物やすみかを見つけ出すのか、などについて学びました。

ものごとへの知識が増えるにつれ、私の住んでいる世界に喜びが増していきました。数学や地理を学ばずと以前に、かぐわしい香りに満ちた森に、また草の葉の一枚一枚に、あるいは幼い妹の手のくぼみやその曲線に、美を見出すことを教えて下さいました。先生は、私の初期の思想形成を自然と結びつけることにより、自分と鳥や花は同じ楽しい仲間なのだという感覚を私の中に育てて下さったのです。

第六章

私は今や全ての言葉に通じる鍵を手に入れ、言葉の使い道を知りたいという気持ちにはやりました。普通の子供は何ら特別な努力なくして、聴きながら言葉を習得します。人の口からこぼれ出る言葉を、いわばそれがまだ飛んでいる間に、嬉々として捕まえてしまいます。一方、耳の聴こえない子供は、時間のかかる、ときには苦痛を伴う方法を講じながら、畏にかけないようにしてその言葉を捕まえなければなりません。

しかし、言葉を捕まえるためにいかなる過程を経るにせよ、その努力の結果は素晴らしいものです。たった一つのものの名前を知ることから始まった私達は、一步一步前に進みながら、一つの言葉をたどたどしく綴っていた初期のころから、シェイクスピアの文章に込められた思想を一瞥のもとに理解することができるようになるまでの遙かなる道のりを、いつの間にか克服していました。

初めの頃は、先生が何か新しいことを教えて下さっても、私はあまり質問したりしませんでした。自分の考えも漠然としていましたし、それを表現する語彙も不十分だったからです。ところが、事物に関する知識が増え、より多くの言葉を覚えるにつれて、質問の範囲が広がり、同じことについて、何度も何度も繰り返し質問して、より詳しい答えを求めるようになりました。そしてときには、小さい頃に経験して頭に刻み込まれていたひとつの印象が、新しく学んだ言葉によって蘇ってくることもありました。

ある日の朝、「愛 (Love)」という言葉の意味を初めて尋ねたときのことを覚えています。それは私がまだたくさんの言葉を覚える以前のことでした。私は庭でスマレを見つけたので、それを先生のところへ持って行きました。先生は私にキスしようと言われましたが、そのころの私は、母以外の人からキスされることを嫌っていました。それで先生は私を優しく抱き寄せて、私の手のひらに「ヘレンを愛します (I love Helen)」と書かれました。

「愛って何ですか？」と私は尋ねました。先生はいっそう私を引き寄せて、私の心臓を指で差し、「それはここにあるのよ」とおっしゃいました。私はそのとき初めて自分の心臓の鼓動に気がついたのですが、手に触れることのできるものしか理解できなかった私にとって、先生のその言葉はたいへんな謎でした。

私は先生の手にあるスマレの花の匂いをかぎ、半分は言葉で、半分は身振りで、「愛って、花の甘い香りのことですか？」という意味のことを尋ねました。

「いいえ」と先生はおっしゃいました。

私は再び考えて、そのとき私達の上に降り注ぐ暖かな太陽があったので、私は熱のくる方向を指差しながら、「愛ってこれではないの？」と尋ねました。私は、その暖かさで全てのもを育てくれる太陽ほど素晴らしいものはないと思っていました。しかし、先生は首を横に振られたので、私は落胆し、ますます謎に包まれてしまいました。なぜ先生は「愛」をはっきり示して下さることができないのだろうかと思議に思いました。

その一日か二日後のことですが、私は、二個の大きなビーズの次には三個の小さなビーズというように、大きさの違うビーズ玉を順番に組み合わせながら糸に通して行きました。私は何度も間違え、先生はその度ごとに優しい忍耐力で教えて下さっていましたが、そのうち、明らかに間違えてしまったということに自分で気がついて、一瞬意識を集中させ、どのように組み合わせるべきであったかを、必死で思い出そうとして行きました。そのとき先生が私の額に手を触れて、力強く「Think (考える)」と書かれたのです。

私は閃光のひらめきのように、この言葉が今私の頭の中で進行していることの名稱なのだということを悟りました。これが、私が抽象的概念を認識した初めての出来事です。私は長い間、手を止めてじっとして行きました。私は膝の上のビーズのことを考えていたのではなく、今ひらめいた新しい概念の光に照らして、「愛」という言葉の意味を探ろうとして行きました。

その日はずっと、太陽は雲に隠れて、時々雨が降ったりして行きましたが、突然日が射してきて、南部特有の輝きになりました。私は先生にもう一度尋ねました。

「愛ってこれではないの？」

「愛とは太陽が出てくる前の、空にある雲のようなものです」と先生はお答えになりました。よく理解することができませんでしたので、先生はもっと易しく説明して下さいました。

「あなたは雲に触れることはできません。しかし、雨には触れることができます。また暑い一日の後、花や乾いた土地が雨を受けて、それらがどれほど喜ぶか、あなたはよく知っています。同じように、愛にも触れることはできません。しかしそれが全てのものに注ぐ、甘美な優しさを感じることはできます。愛がなければ、あなたは幸せを感じることもないし、遊ぶ気持ちにもならないでしょう」

美しい真理が私の心に炸裂しました。私は、自分の魂と人々の魂との間には、それを結ぶ目には見えない糸があることを感じました。